



図3 集団の構成と課題のタイプ別にみた
集団凝集性の推移

表6 集団凝集性の分散分析

SV	df	MS	F	
集団の構成 (A)	1	0.73	2.01	
課題のタイプ (B)	1	1.78	5.10	p < .05
課題の提示順序 (C)	1	0.00	0.001	
A × B	1	0.32	0.91	
A × C	1	0.06	0.18	
B × C	1	0.27	0.78	
A × B × C	1	1.46	4.19	p < .05
Error	56	0.35		

れる。しかしながら、集団凝集性はさらに、集団構成（等質か異質か）と課題のタイプ（乱数表集計か創造性検査か）と実行の時期（前半か後半か）との間に3次の交互作用を示す複雑な変動を見せた。このような状況の中であって、集団の成績は、集団構成と課題のタイプとの間の交互作用効果を期待したわれわれの仮説に反して、いずれの要因の主効果も交互作用をも示すことなく、わずかに課題提示の順序（＝課題実行の時期）の主効果と、これと集団構成との交互作用にいずれも $p < .20$ 水準（ただし両側検定）の有意性を示したに過ぎない。すなわち、異質集団は前半において等質集団より低い成績を示すが、後半これに追いついているのである。すでに指摘した通り、異質集団はその成員間の異質性ゆえに、作業体制を整えるの

に等質集団より長い時間を要するであろうことを予想して、始めからこれを仮説に組み込んでおけば、上記の結果は片側検定による $p < .10$ 水準の有意性と読み替えることが出来る。

以上のことは、集団の等質性・異質性が集団の成績に及ぼす効果を検討するためには、時間的推移という要因を考慮に入れる必要があることを示唆している。

第2実験

目的

第1実験の結果をふまえて、時間的推移という要因をいっそう明確な形で実験デザインに組み込み、改めて集団の成績に見られるであろう集団構